

公立文化施設職員が地域に出て アートコーディネーターになるための2年間

社会包摂についての学びと実践をふりかえる



目次

2	はじめに 文化施設で働く誰もが コーディネーターになる	10	Case1 こども食堂 演劇をつくることは、 みんなで世界をつくること	22	研修参加者9人の声 2年間で生まれた気づき、 自分の中の変化
4	なぜこの研修が 生まれたのか	14	Case2 病院 全職員が通る廊下で 開催された年表企画 (Chronologies)	26	おわりに アートと地域における コーディネーターの可能性
6	実践研修1年目 (2022年度)	18	Case3 福祉施設 モニターに映せる 「りーどけあ体操」を 利用者をつくる		
8	実践研修2年目 (2023年度)				

はじめに

文化施設で働く誰もが コーディネーターになる

研修参加者がアーティストと連携し、
アウトリーチ型のワークショップを企画・実施。
地域の課題・社会包摂に取り組む。

本冊子は、公益財団法人堺市文化振興財団事業課と堺アーツカウンシルが2022年度（令和4年度）から2年間、協働で取り組んだ研修事業を記録し、紹介する目的で作成されました。

この研修は、堺市内にある公立文化施設等の職員を対象として、参加者が地域の様々な主体（教育・医療・福祉・観光・国際交流・まちづくり）と連携したワークショップ事業を企画コーディネートするためのスキルやマインドを獲得することを目的とします。

日頃は所属する地域文化施設で事業を開催することが多い参加者が、この研修では地域の現場に出向く「アウトリーチ」を経験します。また、地域で様々な相手にワークショップを届ける際に大切な「社会包摂」の考え方を学びます。

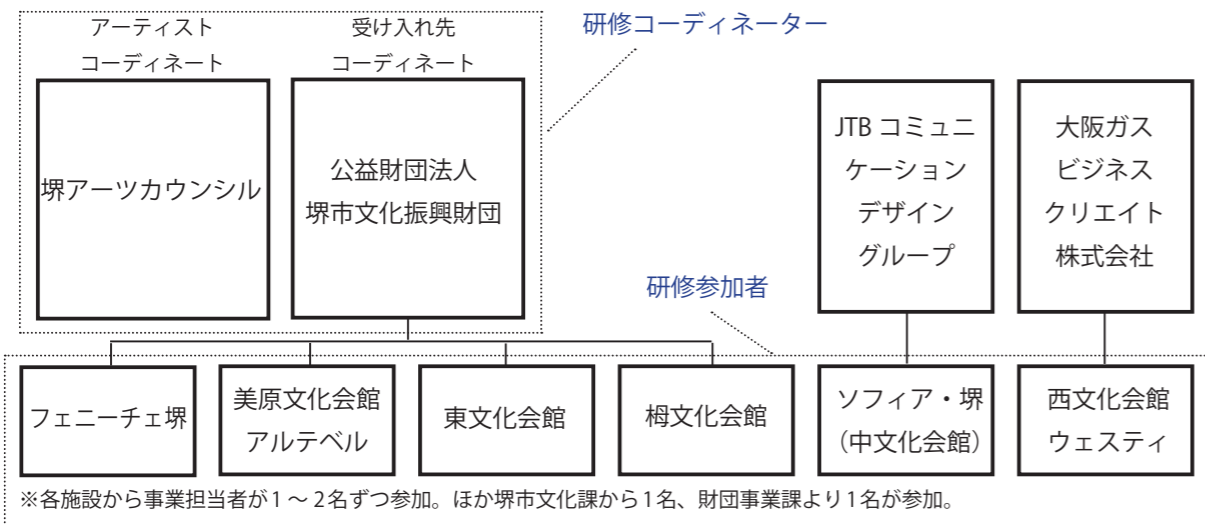
アウトリーチとは、ホールや美術館等での芸術鑑賞とは異なる、従来の場所や方法にとらわれない出張型のアート活動です。これまでは、例えば年齢や障害等が理由でホールに行けないというような、日頃文化芸術にふれる機会の少ない人たちのところに体験を届ける活動を意味することが主流でした。近年では、障害や言語など様々なバックグラウンドがある人々とともに創作すること自体に新しい芸術の可能性を感じ

じて、そうした人々のところにアーティストが出向くという動機付けも重視されるようになりました。

また、社会包摂とは、ここでは「それぞれに違いのある私たちが、そのまま互いに尊重され、共に生きることができる社会を作る営み」であると表現しておきます。芸術が一部の限られた人々の物になってしまわないためには、芸術をあらゆる場所に届けるだけでなく、芸術の在り方自体が変わっていくことが求められます。「本来芸術は人々にどんな価値を届けるものなのか」「人々が共に鑑賞・創作することで何が起きるのか」といった芸術の本質を問う根底には、社会包摂の考え方があります。この研修では、社会包摂を頭だけではなく実感を通して理解することを目指しました。

この研修では、1年目は座学・模擬体験を通して、ワークショップとは何か、社会包摂とは何かの知識・考え方を学びます。2年目は実践編として、参加者がチームに分かれ、「子ども食堂」「病院」「福祉施設」の現場で、アーティストと連携をしてワークショップを企画実施します。地域とはどう関わればよいのか、いいワークショップとは何か、そのために自分たちは何を心がけるべきか。参加者は研修を受ける過程で、それぞれ価値観を揺さぶられながら、そうした問いに向き合います。この研修で参加者が何を学び、何を感じたのか。この取組から生まれたことが、読者の皆様にとってヒントとなることがあれば幸いです。

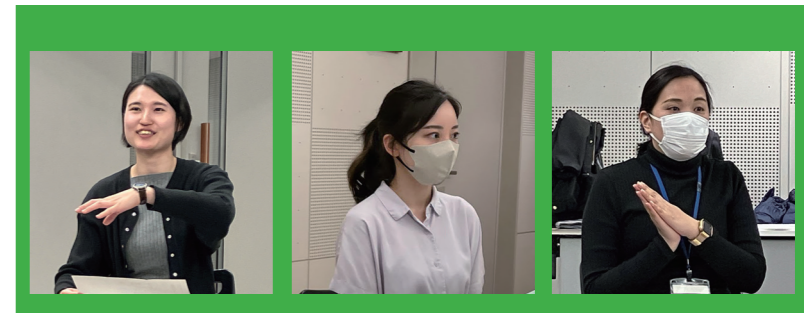
【研修実施体制】



研修参加者

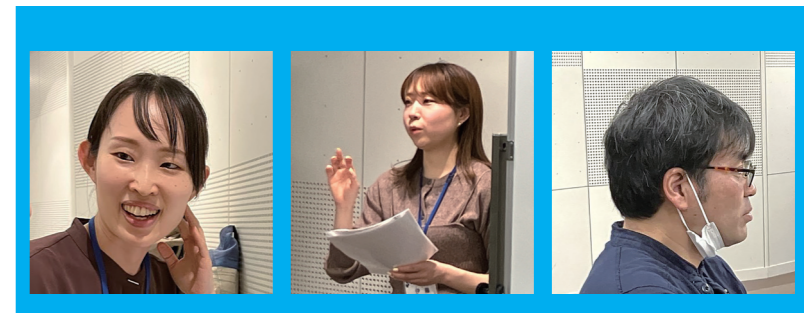
子ども食堂チーム

左から
大宅早紀
(堺市文化観光局文化国際部文化課)、
濱道佳乃
(西文化会館 ウェスティ)、
牧村美音里
(東文化会館)



病院チーム

左から
石澤久美子
(堺市文化振興財団 事業課)、
伊藤礼子
(梅文化会館)、
山田晃平
(フェニーチェ堺)



福祉施設チーム

左から
以倉雅美
(美原文化会館 アルテベル)、
満澤のり子
(フェニーチェ堺)、
宮口こずえ
(中文化会館 ソフィア・堺)



研修コーディネーター

堺市文化振興財団



常盤成紀 ((公財)堺市文化振興財団事業係長)
2021年から現職。市内小中学校・認定子ども園・子ども食堂等向け芸術家派遣事業／若手芸術家育成育成事業／市内文化団体支援事業(事務局業務)／職員研修等の企画・取りまとめ・予算管理を担当。個人でも音楽や執筆を通じた表現活動を行う。

堺アーツカウンシル



上田假奈代 (プログラム・ディレクター)
詩人、詩業家。2003年大阪で喫茶店のふりをしたアートNPOココロームを始め、釜ヶ崎芸術大学やゲストハウスを開き、「であいと表現の場」を運営する。堺アーツカウンシルとして、地域が創造的になるアートの取組を応援している。



中脇健児 (プログラム・オフィサー)
場とコトLAB代表、大阪芸術大学芸術計画学科准教授。ファシリテーター、コミュニティデザイナーとして多様な市民協働、プロジェクトを手がける。堺アーツカウンシルではソーシャルエンゲイジドな活動の伴走支援を行っている。

それぞれに違いのある私たちが、
互いに尊重され、共に生きる社会をつくるために

なぜこの研修が 生まれたのか

常盤成紀



1年目の研修から。視覚障害のある俳優・中川圭永子さんを講師にむかえた。

社会的課題の解決が 堺市の重点的方向性

堺市では、2021年（令和3年）から施行された第2期堺文化芸術推進計画において、「文化芸術が子どもや高齢者、障害者等にも社会参加の機会をひらく機能を持つという「ソーシャルインクルージョン（社会包摂）」の理念を踏まえて自由で多様性を持った市民文化の実現」という前期計画が踏襲され、重点的方向性には「文化芸術を通じた社会的課題の解決」が明記されました。それは2017年（平成29年）に改正施行された文化芸術基本法の影響があります。そして同法は「障害者による文化活動推進に関する法律」（2018年（平成30年））や、「劇場、音楽同等の活性化に関する法律」（2012年（平成24年））等にも深く関係しています。

この文化芸術基本法では、「文化芸術に関する施策の推進に当たっては、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが重要であることに鑑み、文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない。（第二条第10項）」とあり、文化芸術が素朴に「振興の対象」とされてきた旧法から一転、様々な領域と連携して価値を発揮する役割を持つものとして文化芸術が位置付けられ、またその価値創造によって更なる文化芸術の発展をめざすものとされました。

それらを受けて、堺市の文化行政では、様々な地域主体との連携、文化芸術を通じた社会包摂事業に関する取組を拡大することが目標となりました。

地域文化施設を束ねる 堺市文化振興財団

堺市文化振興財団（以下、財団）には、堺市の外郭団体として、文化施策に掲げる目標を具体的に事業の中で実現していく専門機関としての役割が期待されています。財団は、堺市内にある地域文化施設のうち5施設の指定管理事業（2021年時点）と、事業課が実施する社会包摂事業（アウトリーチ・地域連携・人材育成）という二つの柱を有しており、第2期計画の施行当時、財団は事業課を通じて、指定管理する施設に様々な提案・相談ができる立場にありました。

実際に、堺市内全域で社会包摂事業を展開するには、各施設がそれぞれの地域でネットワークを作り、事業を組み立てていくことが必要となります。その機運を高めるために、2021年（令和3年）から財団で新しい取組を始めることになりました。従来は各施設の事業進捗状況を報告する場であった「企画担当者会議」を再構築して、財団が指定管理する全施設から職員が2ヶ月に1回集まり、社会包摂の考え方、企画の立て方、地域連携に向けたリサーチの仕方等を学び、参加者同士で話し合うミーティングを立ち上げました。その会議では、参加者が地域の文化・拠点について調べて報告したり、社会包摂の観点を入れた事業を企画して意見交換したりしました。それまで職員は、市の方針として「社会包摂」という単語を聞いたことはあるものの、「何をやればいいのか分からない」という状態でした。また、施設を越えて一緒に考えたり相談したりする機会は、同じ財団の中でもあまりありませんでした。この会議が原型となる形で、本冊子で紹介する研修事業が企画されるに至ります。

地域文化施設の背中を押すことは、 まさにアーツカウンシルの「伴走支援」

堺アーツカウンシルは、堺市における文化施策の推進支援や進捗確認、市民の文化芸術活動に対するアドバイス、公募型補助金の申請支援、他市町村事例の調査等を担う、文化芸術の専門人材で構成された組織です。このアーツカウンシルは東京、名古屋、新潟、長野、沖縄等の様々な地域に設置さ

れていますが、特に堺市の特徴は、補助金の交付自体よりも、市民の文化芸術活動への伴走支援を主たる業務として、資金面だけでなく、ノウハウや情報の提供、そして活動する市民が人とのつながりや心の支えを得られるような取組を広げています。アーツカウンシルメンバーは文化芸術だけでなく、子育て、教育、福祉等の様々な領域に精通しており、伴走支援の過程では、それぞれの専門家の立場で市民と一緒に悩むことを大切にしています。

その堺アーツカウンシルは、活動を続けるうちに、「市民と最初に接し、市民にとって一番の相談相手となるべきは地域文化施設ではないか」「その職員が地域連携や社会包摂事業の企画に関するスキルを高めることは、伴走支援の担い手を広げる意味でとても大切だ」と考えるようになりました。

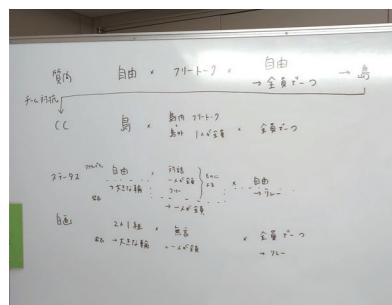
おりしも財団では、企画担当者会議について、座学だけではなく実践を通じた研修に発展させたいと考えており、財団と堺アーツカウンシルで協議が始まりました。

文化芸術振興基本法の理念を実践していく責務は法律上自治体にある一方で、堺アーツカウンシルはその役割として、他市町村の参考事例になるような人材育成の仕組みやノウハウを構築し、公開することが期待されています。そこで堺アーツカウンシルとしても、財団と連携する研修事業を「モデル事業」と位置づけて、研修全体の設計に関わり、また講師やアーティストの選定で協力することになりました。さらに、対象を財団が指定管理する施設に限定せず、広く堺市内の公立文化施設に声を掛けて研修参加者を募ることにしました。

こうして、財団と堺アーツカウンシルが連携して、地域で社会包摂事業を担う公立文化施設の職員に向けた研修事業が実現することになりました。

実践研修1年目 (2022年度)

コーディネーターとして必要なスキルとマインドを身に着けるための座学・模擬体験の期間。研修自体もワークショップ形式で実施することで、頭と身体で「わかる」ことを大切にしました。



2回目 体験と座学でワークショップの構造を学ぶ

ワークショップを構成する「チェックイン」「アイスブレイク」「アクティビティ」「チェックアウト」の概念を習い、その流れに沿って実際にワークショップを体験しました。ワークショップを「グループ登山」に例え、その段階的なステップ構成および踊り場のデザインが重要であると学びました。



5回目 ヒアリングと打ち合わせでコーディネート学ぶ

実際の現場を参考につくられた架空の事例を基に、学校で実施する想定ワークショップを模擬で企画実施しました。常盤が学校関係者の役となり、学校へのヒアリングを模擬体験しました。また、上田(詩)・中脇(造形)・中川圭永子(演劇/ゲスト講師)は学校に派遣されるアーティストの役となり、ヒアリング内容を基に、講師と共にチーム毎でワークショップを組み立てました。現場の様子をいかにアーティストに伝えるか、同じ事例でもアーティストによって内容がどう変わるかについて学びました。



9回目 1年間の変化を確認し、それぞれの気づきを共有する

各回終了後に実施したアンケートの集計結果から、社会包摂やワークショップの理解度について1人1人の変化を可視化して共有しました。研修開始当初にあった「素朴な講座・教室とワークショップとは何が違うのか」等の疑問について改めて参加者同士で語り合い、アートワークショップが実現できることの幅広さを依頼者に伝えることの難しさについても共有しました。



1回目 社会包摂とワークショップの親和性を学ぶ

「誰しにも創造の機会を開くことで、人が社会参加や他者とのつながりを手にすることができる」という社会包摂の根幹について、上田が紹介する釜ヶ崎芸術大学の実践例を通して学びました。また、ワークショップを設計する際に大切とされる「双方向」「心理的安全性」というポイントが社会包摂につながることを理解しました。

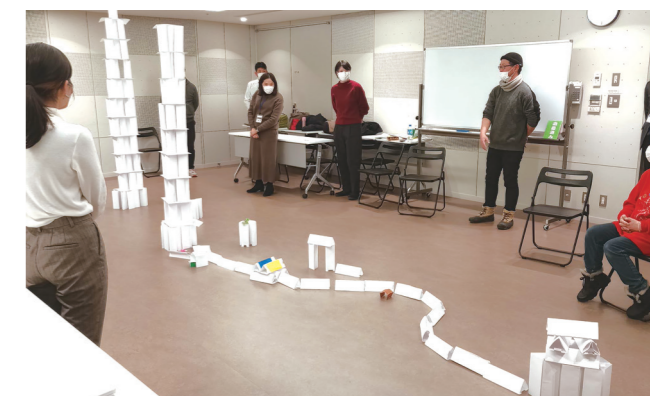


3～4回目 体験したワークショップを分解・分析する

上田が進行するワークショップを実際に体験し、それまで学んだ知識を基にワークショップの構造を分解し、分析しました。上田のファシリテーターとしての細部の振舞には「誰もがありのまま場の一員として認められる」という考え方に基づくことを理解し、ワークショップにおける社会包摂とは何かを学びました。

6～8回目 模擬実践を通して「何が起るかわからない本番」への心構えを学ぶ

上田は対象の6年生が卒業前であることに着目し、同級生の記憶や感情から学校生活の思い出を絵と詩にするワークショップを実施しました。中脇はクラスに図工や創作が好きな児童がいることに着目し、卒業前に全員で一体感を味わう立体造形ワークショップを実施しました。中川は、クラスに外国ルーツの児童がいること、中学校では新しい友人と出会うことに着目し、他者との出会いの面白さをテーマに、自身の視覚障害とリンクさせたワークショップを実施しました。研修参加者は、ワークショップのコーディネーター、および当日スタッフとしてどう動けばよいのかについて学びました。



実践研修2年目 (2023年度)

実践の受け入れ先として、常盤がコーディネートする形で「こども食堂」「病院」「福祉施設」の3か所を設定。研修参加者はチームに分かれて、アーティストと共にプログラム内容を企画しました。受け入れ先へのヒアリング、アーティストとのコミュニケーション、プログラムの組み立て方等、実践して初めてわかることがたくさんありました。また、制作過程で関係者と対話することで、社会包摂やワークショップを各自が自分の言葉で語るレッスンにもなりました。



2～3回目 企画過程の伴走支援

チーム毎にアポイントメントを取り、現地下見・ヒアリングを行いました。ヒアリング結果を全体で共有したところ、どのチームも、受け入れ先から挙がるたくさんニーズをすべて素直に受け止めて迷いが出ている様子が見られました。そこで講師から、まず受け入れ先の活動理念を深く理解し、それを踏まえて課題を整理したうえで、どんなアプローチがいかを一緒に考えようとアドバイスしました。



8回目 2年間の総振り返り

研修参加者が2年間の振り返りを行いました。ワークショップや社会包摂に関するイメージ・考え方の変化、実際にプログラムを企画運営してみて感じた難しさや気づき、今後の抱負等、様々なことをお互いに共有しました。それぞれの感想はp.22～25をご覧ください。



1回目 受け入れ先の発表

3団体の概要を説明し、参加者の興味に応じてチーム分けをしました。現地下見と受け入れ先へのヒアリングに向けて、講師から業種・職種のトレンド、特徴、課題等についてレクチャーして、下見時に確認するとよいポイントやヒアリングのコツを確認しました。



4～5回目 アーティストの決定、顔合わせ

チーム毎に課題が整理できたところで、講師が紹介するアーティスト候補の中から、参加者がアーティストを選びました。アーティストの調整・依頼は堺アーツカウンシルが行いました。アーティスト決定後、チーム毎に顔合わせを行い、参加者からアーティストに受け入れ先の状況、希望等を共有しました。それからアーティストを受け入れ先に引き合わせ、実施プログラム内容の検討に進みました。

6～7回目 実施プログラムの提案と決定

アーティストたちからの企画案を受け取ります。企画案の狙いや修正可能範囲等をアーティストに確認後、受け入れ先に説明、今後の進め方を調整していきました。今回は、1回で完結する表現ワークショップ、今後の団体活動にも活用できる成果物を共に創作するワークショップ、一定の期間中にだんだんと完成していく参加型展示プロジェクトというように、受け入れ先毎にヴァリエーションが生まれました。

11月～1月 プログラムの実施

Case1 こども食堂

研修受け入れ先
東深井つどいば食堂「ふらっと」
堺市中区深井畑山町202-1
受け入れ担当：太田佳世
<https://www.instagram.com/fulatto2525/>



毎週金曜日開催の「放課後ふらっと」（こどもの学び場・遊び場）、月1回開催の「遊び場ふらっと」、夜間開催の「学習ふらっと」を開催している。

→詳細はp10～13へ

Case2 病院

研修受け入れ先
社会医療法人同仁会耳原総合病院
堺市堺区協和町4丁465
受け入れ担当：虎頭加奈
<https://www.mimihara.or.jp/>



1950年に民家の中2階で診療を始め、地域住民の100円のカンパを希望の芽として開院。病を治すだけでなく、心にもほっと希望のあかりが灯ることを祈り、全てのアートを「希望のともしび」とらえ、院内の随所にアートを展開している。

→詳細はp14～17へ

Case3 福祉施設

研修受け入れ先
小規模多機能ホームリードけあ
堺市中区平井124-1
受け入れ担当：阪田篤美
<https://www.instagram.com/leadcare.corporation/>



2019年開設。高齢者のための小規模多機能ホームリードけあ。隣りに就労継続支援B型こはな、どら焼きカフェ米花（こはな）を運営している。米花は火曜日から金曜日までの12時から15時まで営業。

→詳細はp18～21へ

演劇をつくることは、 みんなの世界をつくること

アーティスト：樋口ミュ（劇作家・演出家）、
中川圭永子（俳優）

報告：上田假奈代



日時：11月12日(日)、11月26日(日)

午前の部/10:30～12:00、午後の部/13:15～14:45

会場：深井沢町会館（東深井つどい場食堂ふらっと）

対象：午前の部/1年生～3年生、午後の部/4年生～6年生

こども食堂チーム：大宅早紀、濱道佳乃、牧村美音里

「おしえてほしい～見て・伝えるワークショップ～」と題し、身体を動かしたコミュニケーションゲームや視覚を制限した体験、演劇の力を借りた物語づくりやどう伝えていくかを想像力と工夫を駆使して発表する。視覚障害を持った俳優、中川圭永子がいることで、自然と伝えることに自覚的になっていく。樋口ミュの「演劇ワークショップは、発表を目的にするのではなく、こどもたちの中で何かが起こる、回路が増えるものであればいい」というモットーの通り、想像力の海で楽しむこどもたちの姿が印象的であった。午前の部、午後の部の合間には、こども食堂が用意してくれたお昼ご飯を全員で楽しんだ。

①月に一度のこどもの遊び場開催の様子。1番人気は「スーパーボールすくい」なのだとか。②つどいば食堂「ふらっと」の太田さんとの打合せ。名前の通り、誰でも交流できる気軽かつオープンな場づくりを目指しているとのこと。



ヒアリングや視察からわかった特徴や課題

こども間同士のコミュニケーションが課題

- ふらっとはこども限定ではなく、誰が来てもいい仕組みで開催している。
- 「放課後ふらっと」の活動は基本週一。夕方4時から小学生が集まり、夜の7時からは中学生が小学生の宿題を手伝ったり、大学生のボランティアも勉強を教えてくれる。
- 一方で「こどもたちの中での、コミュニケーションの仕方に課題がある」と感じている。
- こども食堂のLINEに対し、ボキャブラリーが少ないことで誤解が生じてしまったり、保護者からも似た相談を受けている。
- 自己表現ができて、お互いを認め合うようなワークショップができればありがたい。
- 場所に関しては、いくつか使える場所の候補はある。身体を動かすのであれば、小さい体育館のようなフロアがある深井沢町自治会館という場所も活用できる。

アーティストへの依頼内容

自分と違う他者への想像力と伝えることの面白さを

お願いしたのは、劇作家・演出家の樋口ミュさんと、俳優の中川圭永子さん。中川さんは1年目の研修でもお世話になり安心感があったからでもあります。視覚障がいを持った俳優と共に演劇ワークショップを手がけることは、こどもたちにとって他者とのコミュニケーションを実感できる機会になると考えました。そして、中川さんと一緒に舞台を手がけている樋口ミュさんも、一般の

方と舞台を創る経験やワークショップが豊富であることと、二人の関係性が良い波及効果を生むとも考えました。相手に自分の考えを伝える面白さと大切さを演劇ワークショップのプログラム内容だけでなく、アーティストと過ごす時間そのものからも様々な気づきを得られるように、とお願いしました。



大阪市西成区のひと花センターで中川さんが定期的に開催しているワークショップに研修チームが参加し、目の不自由な中川さんならではのワークショップを体感。写真は中川さん考案の「あっちむいて来い」を体験している様子。

開催に至るまでのやりとりや、当日の様子

演劇的手法を活かし、子どもたちの主体性を伸ばす

準備段階では「子ども食堂の方が、演劇のワークショップと聞いて、最後に達成感が残るものをイメージしないように伝えてほしい」「視覚障害者である自分が、子どもたちにどんな影響が与えられるか考えてほしい」というアーティストの想いを「ふらっと」の太田さんに伝えたり、事前に別のワークショップを体験して、お二人が何を大事にされているか、どんな条件や環境が実施しやすいのかを肌感覚で共有したりしていきました。

本番はのびのび自由に動ける環境が適していると考え、小さな体育館のようなスペースで実施。開催前から樋口さん、中川さんは床に座り、子どもたちと目線を合わせ、談笑を交えることで対等かつ近い距離感をつくっていました。アイスブレイクでは、中川さんが「肩!」「頭!」と身体の部位を語り、その場所を指さす、触れる、他者

の身体を指差す、というように段階的に打ち解け、次にアイマスクをつけるワークも実施し、中川さんの状態を擬似体験するだけでなく、五感を存分に刺激していきました。

その後は、演劇を体験するワークです。樋口さんが用意した物語カードをもとに中川さんと食堂スタッフが俳優となり、子どもたちが考えたストーリーを熱演して「演じる」恥ずかしさをなくします。子どもたちからは「このセリフを言ってみて」「もっと声を大きく」といった演出家のような関わりや、樋口さんが「じゃあ、代わりに演じてみて!」と役者を促したり、「これでトイレってわかるかな?」と聞いて、イスやテーブルを工夫して見立てさせていきました。気づけば、子どもたちはそれぞれがやりたい役割を手がけながら、起承転結を話し合い、最後は自分たちで発表するようになっていました。

アーティストの感想



© 伊藤華織

樋口ミュ

Plant M 主宰。劇作家・演出家。地域創造リジョナルシアター派遣アーティスト。OMS 戯曲賞を最年少・女性初・2年連続大賞受賞。座・高円寺の劇場創造アカデミー演出コースに編入し、佐藤信氏に師事。

その町がいかに豊かであるかは、そこに暮らす人々の生活にどのくらい当たり前前に芸術が存在しているかにかかっている。地域とアーティストを繋げるためには、その地域の自治体の職員、公共ホールの職員が担うところが多いと感じていたので、この研修は今、最も必要なことだと思いました。



© 岡本風倫

中川圭永子

舞台俳優。大学卒業後上京し劇団300(さんじゅうまる)を経て、企画集団A-A'設立。子育て時に地域に目を向け、表現ワークショップの企画や市民による朗読劇を主催。指定難病である網膜色素変性症と共生。

子どもたちは本気で遊ぶので、私も本気で遊びました。いつもながら子どもたちの持つ力には驚きと感動がいっぱいでした。研修の皆様お疲れ様でした!どんな風なワークショップにしようかと事前準備も、本番も楽しかったですね。こんなふうと一緒に作り上げていくことにずっとワクワクしていました。これからもワクワクと一緒に感じて行けたらなあと思っています。ありがとうございました。



アイマスクをつけて、目の不自由な体験。中川さんの声を頼りに居場所を探す子どもたち。



樋口さんが子どもたちからどんどんストーリーを導き出している様子。

実施後のふりかえり

大人の関わり方、ふるまい方の難しさを共有

「高学年は遊べる要素を渡してあげるとどんどん想像を広げてくれる」「低学年の子には発表の形式にとらわれずに見守ることがよかった」と手応えを共有する一方、ワークショップ中、自由に動き回る子どもがいたことに対し、どうすればよかったか、といった関わり方への悩みが研修チームや子ども食堂のスタッフの方から出ました。樋口さんは「あの子は実は話を聞いていて、面白いものを見つけた時、ちゃんと没頭できていた。それはすごいことだし、こちらの基準を押し付けなくていいのでは」と、意図を開示してくれました。それを受けて「どうしても私はみんなをちゃんとさせる役、怒り役に回ることが多く、『今静かにしよう!』と声をかけてしまう。それをしなくても普通に事が進むんだとカルチャーショックを受けました」「お昼ご飯の準備の間に、子どもたちが走り回

らないように、樋口さんが『すぐくゆっくり走るゲームをしよう』と言い換えていたのが印象的でした」と反省の言葉が出ましたが、樋口さんからは「子ども食堂は、家庭の役割を担うこともあるため、怒り役も必要だと思います。そういうフラットなコミュニケーションはアーティストが来る機会を利用してくれればいいのではないのでしょうか」とフォローもありました。

見学の保護者の方からは「演劇と聞いて何をやるんだろう、と思っていましたが、ストーリーづくりや、演じるだけでなく、舞台セットをつくることや背景をホワイトボードに描くなど、恥ずかしがり屋の子でも大丈夫な携わり方が面白く、それぞれがこういう世界観をつくりたい、という主張と話し合う様子が垣間見れて良かった」という声もありました。

研修受け入れ先の感想



太田佳世

東深井つどいば食堂
ふらっと代表

視覚障害のある方とコミュニケーションをとってその世界を体感できたことは、子どもたちにとって印象深い経験になったと思います。お芝居では、発想して協力していく力を想像以上に見せてくれました。本当に楽しそうで、この気持ちと能力を忘れずに育ってくれるといいなと思いました。今回今までふらっとに参加したことがない子どもも申し込んでくれて、新しい繋がりができたことに感謝しています。ありがとうございました。

全職員が通る廊下で 開催された年表企画 (Chronologies)

アーティスト：アサダワタル (文化活動家)

報告：中脇健児



期間：12月5日（火）～1月20日（土）

会場：職員専用廊下

対象：耳原総合病院にて働く医療従事者全員

病院チーム：石澤久美子、伊藤礼子、山田晃平

耳原総合病院開院70周年のおりにつくられた「年表 (Chronologies)」を活用し、そこに職員の方が生まれた当時、つまり「赤ちゃんの頃の写真」と、初めて自覚的に買ったレコード・CDのジャケット写真を展示。それぞれのエピソードは吹き出し付箋にて貼り付けすることや、「ラジオ番組」として設られたBGMを廊下にて流す。職員の方がセクションや世代を超えて、忙しいなかでもほんのりとコミュニケーションできるような仕掛けを考案。写真やエピソードも募集告知だけにとどまらず、講演も実施し、プロジェクト期間中は少しずつ展示が増殖していくことを目指した。

①②耳原総合病院の虎頭（ことう）さんと打合せ。急性期病院への移行で職員の忙しさが増したことや働き方改革などにより、職員間のコミュニケーションが課題とのこと。職員や患者さんからのリクエストを取り入れた、院内放送などにも取り組んでいた。③耳原鳳クリニックが企画する地域住民向けのワークショップ。耳原総合病院では日頃から地域の方と顔の見える関係を築いている。



ヒアリングや視察からわかった特徴や課題

地域の声に応え続ける70年の歴史

- 地域住民からのカンパや要望から設立された背景の通り、地域密着型の病院経営を日々、実践している。
- 地域に点在する関連クリニックでは地域住民向けのワークショップを定期的実施し、患者やスタッフだけでなく、近隣の大学の先生や、図書館のスタッフの方なども参加するなど、日頃から地域の方と顔の見える関係を築く地域医療に取り組んでいる。
- 院内には様々なアート作品が点在するが、それ以外にもアートディレクターとして、美術・身体表現・イラスト・デザイン・広報とそれぞれの専門分野に長けたスタッフが関わっている。
- 地域の人たちによって、健康や暮らしについて学びあい、平和や社会保障への理解を拓ける取組を行う「健康友の会 みみはら」やボランティアグループ「風」があり、社会と病院をつなぐ架け橋活動が活発に行われている。しかし、近年は高齢化が進んでいる。
- 長く勤務する職員は病院の設立背景や地域医療に関わる多様な活動を理解しているが、若手職員や中途採用職員は、コロナ禍の地域に出る機会が減り、また日常業務が多忙のため地域活動への参加を増やすこともできず、歯がゆい現状がある。

アーティストへの依頼

職員間のゆるやかなコミュニケーションと病院の再発見を

病院というと、患者さんへのアプローチを考えたいところでしたが、ヒアリングを通して感じたことは、病院内のスタッフ同士のコミュニケーションが少し希薄になっていることでした。急性期病院（急性期にある患者さんを対象に24時間体制で医療を提供している医療施設）

なので忙しいことや、コロナ禍でコミュニケーションが希薄になってしまったこと、仕事とプライベートをわける若手職員の価値観などが原因にあるように思い、アサダワタルさんには、職員同士の新たな関係を築けるような企画をリクエストしました。



アサダさんとともに耳原総合病院へ訪問。どこのスペースを活用してもよいか、どんなことができそうかを意見交換しながら施設内を案内いただく。

開催に至るまでのやりとりや、当日の様子

単発ではなく継続性のあるプロジェクトに

アサダさんは職員の人数や病院内でのアートプログラム以外の取組（例えば、ラジオの存在など）が気になったようでしたので、アートディレクターの虎頭さんに一度お会いする日程を調整しました。

院内見学でアサダさんは、職員専用階段に気分転換や利用促進のBGMが流れていることや、段差に職員の方のメッセージが掲載されていることに注目していました。また、虎頭さんと意見交換する中で、アサダさんから大阪市内の歯医者や地域活動を例に出し、映画の上映会やお話し会、絵を描く会など、一見歯の治療とは関係のなさそうな取組から普段のコミュニケーションを活性化することで、お互いの情報交換や予防につながっている事例が紹介されました。

病院側もアサダさんの活動を知っており「今後も継続

的な関係を持ちたい」との要望から、病院が主催する「異文化コミュニケーション・カンファレンス」という医療以外の見識を深める研修にアサダさんを招き「住み開き」など、各地で開催している活動のお話を聞きました。今回の「年表 (Chronologies)」の取組も伝える機会となりました。

展示会場は、全職員さんのロッカーがあるフロアの通路だったので、必ず出退勤の際は全員が通る場所です。何度か会場に足を運ぶなかで、通り過ぎる職員さんが笑っていたり、「これいいですねー！」って言ってくれたり、赤ちゃんの写真をみて「これ誰だろう？」と様々な反応がありました。応募が集まったのは最終的に15人。リクエストされた音楽を流し、アサダさんが「〇〇さんからのリクエストをお送りします」と丁寧に伝えていくもので、段階的にvol.3まで録音が増えていきました。



12/5は「ほんで文化活動家ってなにをする人なん? 住み開きからコミュニティでの活動 ゆるく、生きやすくなる表現とは」というテーマでアサダさんが耳原総合病院の企画に登壇。

展示企画「年表 (Chronologies)」は耳原病院の歴史に関わりつつも、みんな一人ひとりの歴史がある個人ということに、愛おしさをもてるようなコミュニケーションを促すもの。

実施後のふりかえり

今後も場面を変えて展開する可能性を

展示に参加した人からは「赤ちゃんの時の写真が手元にない、送りたくても手配にハードルを感じる」といった人もいた一方で「写真を手に入れるために家族に連絡し、それによってコミュニケーションが生まれて良かった」という感想や、参加した人から「どの赤ちゃんが自分だと気づかれるのではないかとドキドキした」という声もありました。アサダさんも「赤ちゃんの写真にすれば恥ずかしさも消えると思っていたが、そうじゃないんだな、という気づきになった」と感想がありました。後日談として参加に至らなくても通りかかった人からは、「ほっこりする」「音楽が常に流れていて癒される」とい

う声がありました。

虎頭さんからは病院の記念冊子を作った当時、年表があまり注目を集めなかったことを踏まえると「毎日通る場所だとしても、職員さんたちが見る頻度がすごい高かった」という手応えを教えてくださいました。「病院や地域の歴史が、誰かの個人の年表や思い出の音楽と交錯することで、耳原総合病院の歴史が遠くの出来事ではなくて、身近に感じた。こういった感覚こそ大事にしたい」「それならば、この型を利用して新入社員研修でも応用できるのでは」と新しいアイデアも生まれアサダさんも今回で終わらない企画の展開を望まれました。

アーティストの感想



利用者ではなく職員を対象としたプログラムは初めてのことでした。“やんわりひっかかる遣り取り”を心がけましたが、反響をはっきり掴めたか自信がありません。ただ病院という極めて多忙な職場環境で役割を超えたその人となりやキャッチする実験はできたかと。すでに制作されてきた年表とラジオ番組の存在から着想を得たので、一つの実験が次の実験へとつながるリレーが大切だと感じています。博士(学術)。

研修受け入れ先の感想



虎頭加奈
社会医療法人同仁会 耳原総合病院 アートディレクター 教学・広報 兼務。

日々のケア現場にアートを差し込んでいく役割の私たちも、時間や医療の制限に追われてもどかしい思いを抱えていました。そんな中、お三名のヒアリングでは看護師や事務から知り得ない思いが表出し、アサダワタルさんによって醸じされた歴史と個人と音楽との交錯が、幅広い年齢層のスタッフに小さな揺さぶりを起こしたのではないかと。「ほっこりした」という年配看護師の嬉しい感想に実感しました。

モニターに映せる「リーどけあ体操」を利用者とつくる

アーティスト:片岡祐介(音楽家)、加藤文崇(映像)、エメスズキ(ダンサー)、上田假奈代(詩人)

報告:上田假奈代



日時:10月18日(水)、11月28日(火) どちらも13:00~15:00

会場:リーどけあ

対象:リーどけあのメンバー

福祉施設チーム:以倉雅美、満澤のり子、宮口こずえ

中区にある小規模多機能ホームリーどけあは、高齢者のサービスと、どらやきの製造販売や軽作業を行う若年性認知症の方が通う就労支援B型作業所を運営。ふたつの施設が扉一枚隔ててひとつの建物に同居し、どちらの部屋にもモニターがあり、YouTubeの映像が流れている。リーどけあでは体操を毎日、どら焼きカフェ「米花(こはな)」では季節のイメージ映像が流れていることに着目。両方のメンバーといっしょに、オリジナルの体操をつくることで交流が生まれ、完成した動画をモニターに映して日常的に身体を動かすことにかかしてもらおうと企画した。

隣接するどら焼きカフェ米花(こはな)を見学する研修チーム。どら焼きをつくる工程の手の動きなど、振り付けにいかせないかを検討している様子。



ヒアリングや視察からわかった特徴や課題

地域とつながりたい。ふたつの施設の交流を促したい。体操いのち!

- ・リーどけあは2019年に開設。小規模多機能ホームと就労継続支援B型こはな、隣にどら焼きカフェ米花を併設している。「リーどけあビレッジ」という、さまざまな人が集まって支え合う構想がある。
- ・壁と扉一枚隔てているふたつの施設はコロナ禍を経て、B型に通う方と高齢者の交流にこれからもっと取り組んでいきたい。異年齢の人たちが交流することで生まれる効果は高そう。
- ・コロナ禍で、地域との接点はまだ希薄。どらやきカフェは地域の人々の声から生まれたが、まだまだ認知されていないと感じている。
- ・リーどけあでは認知症の方が多く、身体を動かしたいニーズがあること、毎日YouTubeで体操映像を流

し、動きはモニター画面を見てもらうことにして、スタッフが一人一人に声をかけることを大事にしている。歌って踊れるナースもいて、「体操いのちなんです」と。

- ・外にちょっとした畑がある。
- ・フランス在住経験のある阪田さんは、町中にアートに触れる機会があったため、堺市中区の状況はさみしいと語る。
- ・阪田さんが「もっと地域とつながりたい」と話されたことが印象的で、研修参加者たちの最初のアイデアは盆踊りのような踊りをつくって近くの公園で地域の人たちと祭りをつくれば、という壮大なもの。公園まで下見にも行ってみた。

アーティストへの依頼

日常的に使える「リーどけあの体操動画」を

リーどけあが一階の平家建てで複合施設であること、奥が介護施設、手前にどら焼き屋と作業場所があること、高齢者や就業支援の方など、さまざまな年齢層が行き来しているが、施設歴は浅く、双方の交流や地域との関わりも少ないため、触れ合うことをしたい、一緒に取り組めることがしたい、といった情報を共有しました。

また、リーどけあでは、歌って踊れるナースが高齢者を励ましながらか体操していること、元気な人もいれば、

ベッドで横になっている人もいて、みんながしたいことを尊重されている状況を話し、片岡さんは「作業するか踊るか、どっちでもいいというのが面白い」と語りました。

デイケアサービスでは毎日モニターを見て体操をしています。就労支援B型の部屋にもモニターがあり、イメージ映像が流れていました。日常的に使われる2つのモニターに着目し、ここに両方の人たちが写っている映像が流れているようになれば、と伝えました。



①ワークショップで3人で一句つくる俳句は歌詞の素材となる。俳句を発表すると必ず褒めてもらうという約束で、全員褒められる。
②俳句から言葉をぬきだして上田さんが歌詞にまとめ、それを引き継いで片岡さんが進行しメロディをつけていくワークショップ。後ろで、動きを引き継ぐエメさんが見守っている。③動きをつくってゆく前に、利用者さんの身体がほぐれるよう、みんなでその人の名前を呼びながら、身体の部位をぼんぼんと叩く。④ワークショップの最中、後方では研修参加者3人も楽しい気持ちで雰囲気作りに貢献。

開催に至るまでのやりとりや、当日の様子

「いくつになっても」というみんなの気持ちを表す言葉が生まれた

打合せでは音頭か体操かは決めきらず、ワークショップをやってみて考えようということに。「労働歌のようなイメージも湧くし、こどもがマネしたくなるような、キャッチーなサビが地域に広がれば」と片岡さん。上田さんは「五七五の合作俳句にして、言葉を拾おうか」とアイデアを語りました。「ワークショップの段取りについても、決めてしまうよりもその場の空気です」というおおらかな提案に。4人のアーティストがいる大所帯ですが、お互いへの信頼がベースにあったことから勘所を押さえるだけで大丈夫なようでした。

ワークショップ初日。会場は利用者さんが飾りをつけてくれ、歓迎ムードを表してくださいました。片岡さんも応えるように、いきなりのピアノ演奏で盛り上げます。

その後は利用者3人がチームとなり、五七五の合作俳句づくりから。俳句のテーマを求めると、利用者からりーどけああ精神を表すような声があがりました。「いくつになっても」。そして、「ジュリーに会いたい」などパワーワードが出てきて、会場は笑い声につつまれました。歌詞ができると、片岡さんの進行ですぐさま音楽がつくれ、みんなで歌いながらの録音です。二日目はその音源を用いて、エメさんがみなさんの動きを引き出し見合うような進行で振り付けが完成。ベッドで寝たきりの方が自ら起き上がって椅子に座るなど、普段見られないような積極的な行動があったそうです。2日間で利用者の方々と一緒に歌詞、振り付け、録音までもしていく様子は加藤さんが見事に撮影してくれました。

実施後のふりかえり

地域社会と関わることは、アートの広がりにもなる

研修参加者、アーティストと施設職員との振り返りの会では、「高齢者」「支援される人」とくくられがちな人たちが、このワークショップでは歩んできた人生が尊重され、個性が発揮されたことが語られました。職員の阪田さんから「ここまで利用者の集中力が持つなんて信じられない、奇跡」と、普段寝たきりの方が自らあそこへ行きたいと起き上がったり、数分おきにトイレに立つ方がずっと集中して参加したことが話されました。

エメさんは、スタッフを見がち利用者さんの視線をその場にいるお互いを見るように、という意図から内容を工夫したことを話されました。

片岡さんは、「カラオケや見本のあるものではなく、どうなるかわからないものを自分たちでつくるとなると集

中するのではないか」との見解。また普段のワークショップはワンオペだが、4人もアーティストがいると力強く、内容にも広がり生まれたことが語られました。さらに「音大や芸大の学生には福祉施設でワークショップをする実習をした方がいい。また堺市で財団やアーツカウンシルがこのような社会包摂の取組を行ない、コーディネーターを育成することは貴重な事業。全国に伝えていきたい」という感想も。

そして、コーディネーターの3人が完成した映像を届けられた際に、りーどけああ皆さんから感想のお手紙をいただきました。コーディネーターは地域を知る機会になり、同地域の文化施設で働いている一人は催し物のチラシを届けに行こうと思うと話していました。

アーティストの感想



エメスズキ
90年よりダンサーとして国内外で活動。現在は即興(@HYORYUSHI1等)を軸に「おどり」を解きつつ、大阪府内にて「からだのアトリエ パオパヴ」活動に励む。

音楽や言葉や映像と常に絡み合いながらワークを行なっている、ワクワクとドキドキが共存する2日間は、とても贅沢で！貴重な時間でした。そこにいる全ての「にんげん」の「いのち」の力が循環しながら、時に「ポコッ」と奇跡を生み出し、できあがった動画「いくつになっても」。いくつになっても……生きていることの尊さ。この企画に関わることができて光栄です。



加藤文崇
ディレクター・映像カメラマン 京都を拠点に、アートに関わるドキュメンタリー映像制作を軸に、メディア全般のディレクションを行う。

ことば、音楽、ダンスと比べて、映像の制作課程はりーどけあさんと共有できていなかったのでは、と振り返ってみて思いました。それでも、コーディネーターのみなさんが事前に、りーどけあさんと良好な関係をつくってくれたおかげでカメラに対しても嫌悪感なく撮影でき、真剣に楽しんでいる皆さんが映像に残ったと思っています。楽しい時間、ありがとうございました。



片岡祐介
音楽家 マリンバ奏者として、新作の委嘱、演奏活動を数多く行い、障害者施設や高齢者施設、病院などの様々な場所で即興音楽セッションを行う。

複数のアーティストと一緒に協働できたのが新鮮でうれしかったです。普段はひとりで現場に行くことが多いので、しみじみ、いいなあと。エメさんのダンスのすすめ方、「まずは身体を動かすことでだんだん心も動いてくる」みたいな感じ。假奈代さんの「必ず全員に声をかける」という態度。簡単なゲームで良い詩が出来てしまう魔法。加藤さんの単に撮影し編集するというのとは違う、鋭い視点でのコミットの仕方。刺激的だったし、ほんとうに勉強になりました。



上田假奈代
p.03参照。今回は言葉(歌詞)のワークショップ部分を担当。

りーどけあでの2回の取組みは明るく、楽しい時間でした。ヒアリングに訪ねた時から、コーディネーター3人はこの場に好奇心とあたたかい気持ちを持ってのぞみ、事前にポスターを作成し、それを施設側が壁に貼ってくださって、当日はひとり一人に声かけを行い、空気をつくってくれました。準備からいくつもの細やかなバトンが渡されていき、その場の可能性がどんどん開いていったように思います。

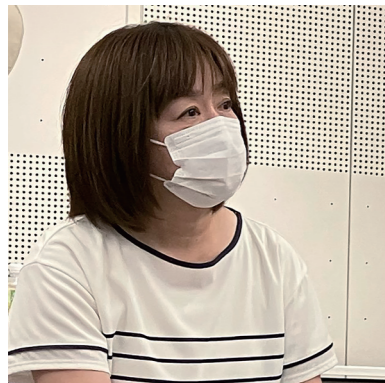
研修受け入れ先の感想



阪田篤美
小規模多機能ホームりーどけあ コーディネーター・ソーシャルワーカー

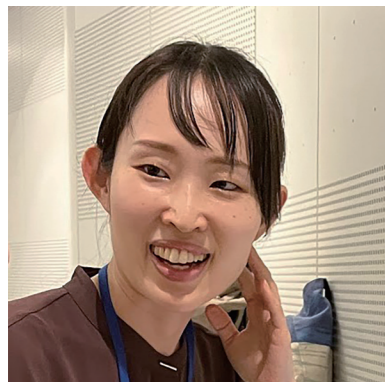
今回はワークショップという素晴らしい機会をご提供いただき心より感謝申し上げます。とても楽しく刺激的な体験になりました。打ち合わせを重ねるうちに期待は高まり、当日はアーティストの皆様の見事なリードでまさにワクワク・ドキドキのライブ感！認知症があっても、障がいがあっても、なくても関係ない。輪になってシェアして五感を駆使して見事にひとつのものを創りあげ、まさにアートの力を実感しました。

2年間で生まれた気づき、 自分の中の変化



美原文化会館 アルテベル
以倉雅美

令和4、5年度とワークショップ実践研修に参加でき、無事終えることができました。4年度は社会包摂事業としてのワークショップについて理解を深めることを主に研修していきました。そこで、ワークショップの作り方や試作など、実践への取組を学びました。5年度は参加施設と実際にワークショップを作り上げていく年となりました。施設利用者さんには「今日は何をやるの？」と緊張もあったと思いますが、アーティストがその場の状況を見ながら、場を盛り上げ、素早く判断し、作り上げていく様子を見させていただきました。また、施設利用者さんの集中力に驚き、感動をいただきました。そして、会館業務と並行しながらそれぞれが考え動くことができ、チームにも恵まれた2年間でした。

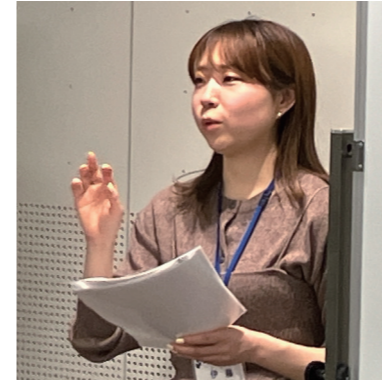


堺市文化振興財団 事業課
石澤久美子

「文化芸術による社会包摂とは？ワークショップって何をやるの？」という状態からスタートした研修でしたが、講師の皆さんから理論と実践を体系的に学べたことで、当初浮かんでいた「？」への答えも自ら説明できるようになり、何よりワークショップを企画運営する上での「視点」が増えたと感じています。

というのは、研修1年目にファシリテーター、参加者、コーディネーターそれぞれの立場を体験・分析したからこそ、2年目には多様な立場=視点から企画を見つめ、考えられたという実感があるからです。

ふりかえれば、この研修は2年がかりの長編ワークショップだったようにも感じており、皆で意見を交わした過程や自身で悩んだ経験を糧として、今後も頑張りたいと思います。



榎文化会館
伊藤礼子

私は耳原総合病院のチームとして研修に参加し、病院の職員を対象に、展示型のワークショップを行いました。生まれた年代と年表を眺める方や、流れる音楽を懐かしむ方など、自分自身の時間と照らし合わせて展示と関わる姿は非常に印象的でした。文化芸術を通じて個人の思い出や経験に触れられたことは、この2年間の学びを実感する瞬間でもありました。

また、アサダさんや虎頭さん、そして講師の皆さんを含めた振り返りの場で、今後の展開について話すことができたのも成果の一つだと思っています。コーディネーターとしての経験がない私にとって、手探りで不安もありましたが、今回の企画が少しでも誰かの心に残っていたら嬉しいです。



堺市文化観光局文化国際部文化課
大宅早紀

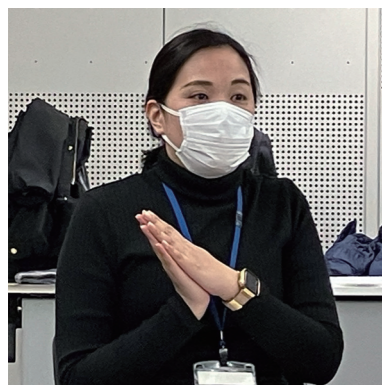
私のチームは、11月に2回、主にこども食堂に通う小学生を対象に、ことばとからだを使った演劇ワークショップを行いました。ワークショップでは、私はこども達に積極的に発言し参加することを望んでいましたが、実際は演じることだけが参加の方法ではなく、演劇をつくることやみること、その場の参加方法のひとつだと感じました。このことから、ワークショップの参加の仕方に正解はないと学び、参加者の行動を尊重する場をつくることの重要性を実感しました。

この2年間の研修を通して、文化芸術における社会包摂事業は、即座に定数的な結果をもたらすわけではなく、参加者一人一人の自己選択を通して実感した自己尊重感を育むことを目的としていることを学び、職場内でもその重要性を伝えていきたいと思っています。



西文化会館 ウェスティ
濱道佳乃

ワークショップを開催するにあたり、こども食堂ふらっとさんと打合せを重ねました。その中で、いかにこども食堂が地域の方々の拠り所として大切にされているかを目の当たりにし、また運営されている方たちの地域やこどもたちへの想いも感じることができました。地域の方々が何を必要としているのか、地域に溶け込むようなワークショップを開催するにはどのようにすればいいか、様々なことを考える必要があり、自分自身の視野が広がったと感じています。開催後は、こどもたちと食堂運営の方たちが感想をお話されていたりして、ワークショップを通して地域のコミュニケーションが増えていくことがすごく嬉しかったです。



東文化会館
牧村美音里

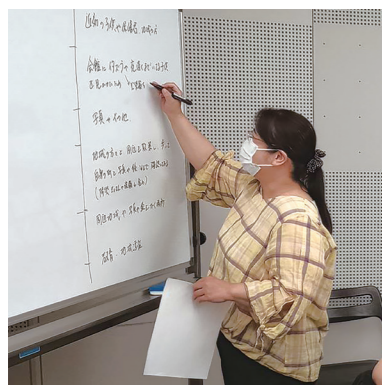
今回ワークショップを実際に作っていくにあたり、実施先（こども食堂）の代表の方とお話をしていく中で、日々施設内で感じている課題にフィーチャーした内容（相手への気持ちの伝え方・言葉の選び方）で実施したが、まず「何を」すれば課題の解決に繋がるのかを考えることや、内容が決まってから募集のチラシを作成する際にどのような文章だと「参加してみたい」思ってもらえるか…など、普段の会館の事業よりも深く考えることが多くあった。そしてワークショップ当日、どのようになるか不安な気持ちもあったが、自分が思っていた以上にこどもたちが積極的に参加してくれたこともあり、食堂の方も見た事がないこども達の一面を引き出すことができた。今後この体験がこども食堂の抱える課題の解決のきっかけとなり、さらにこどもたちの思い出になることを期待したい。また自分の中でも2年間の研修を通して、座学やワークショップを実践してやっと「社会包摂」というものが理解することができたと感じている。今後も所属先の事業で今回の研修で得たものを生かされるように取組をしていきたいと考えている。



フェニーチェ堺
満澤のり子

1年目に受講した研修の中で、たとえワークショップに主体的に参加していなかった人がいたとしても、まずその場にいてくれることが大切で、その中で何かしら吸収しているものがあるというお話があり、とても印象に残った。また、模擬ワークショップをする中で、コーディネーターと一緒に参加して楽しみながら場づくりをするということ学んだ。このことを心にとめて2年目の実践研修に臨んだ。

実践では小規模多機能ホーム「りどけあ」さんでワークショップ「つくってodorou」を行った。参加者の皆様が安心して楽しく活動して下さっている様子を見て、実施先の雰囲気にあったアーティスト選定をすることが成功する重要な要素だということを実感した。



中文化会館 ソフィア・堺
宮口こずえ

私は「社会包摂」なるものを今回の研修ではじめて耳にしました。社会包摂につながるワークショップとは「成果物がなくてもいい、だれでも参加でき、どんな意見でも尊重され、その場の時間共有が重要」といった考え方に共感しました。

また、ワークショップ『うたをつくってodorou』と題し、作曲・作詞・ダンス制作をし、できあがった楽曲に合わせてダンスを踊る様子を映像に記録するといった大作に挑戦しました。

参加アーティストが総勢4名となり、コーディネーターとしては施設担当者やアーティストの意見のすり合わせや考え方の共有などに苦慮しましたが、参加者の方には好評をいただきました。会館運営だけの業務では体験できない、文化活動が社会包摂に寄与できることを実際経験できたことで、今後の文化会館の役割が広がる自信につながりました。



フェニーチェ堺
山田晃平

初年度は講師の中脇さんから主にワークショップ（以下、WS）構築の方法論を学び、同じく假奈代さんからはWSの着地に幅を持たせ、必ずしも目的合理性に沿った進行をしなくてもよいという視点を得た。けえこさんとは実際にWSを設計してみるという目的以上に、視覚障害者のリアルに触れることができた点で有益だった。2年目の耳原総合病院での実地研修では先方から多大な協力をいただき、アーティストのアサダさんを巻き込んだ病院側の壮大なプロジェクトの端緒となる、貴重な体験ができた。課題の解決に対して、個人的にはビジネス的なアプローチに寄りがちなところを、アートを媒介して発想する面白さを学ぶことができたのは、大きな収穫だった。

館長の声



梅文化会館 館長
林志郎

本館職員である伊藤に、このような場を提供していただき大変感謝しております。一つの館では経験できない事に携わり、また、他館の皆様や財団の皆様とともに一つの目標を達成するために協力し合い、成し遂げたことは何事にも代えがたい貴重な経験だと思います。

本来の会館業務に加え大変忙しくしている伊藤ではありませんでしたが、確実に成長している姿を見るのが来ました。持ち前のてきぱきとした行動はもちろん、相手の立場や思いを感じ取りながら行動することが、益々成長したように感じ取れました。

また、今回の研修に気兼ねなく参加できるように配慮いただいた梅文化会館職員の皆様にも感謝いたします。彼女の今回の経験が当会館の益々の発展に影響があるものだと確信しています。



西文化会館 館長
川口芳伸

今回、当館で実施する事業内容に新たなエッセンスを取り込むチャンスがあり、職員の成長の場になればと思いついて参加させることにいたしました。

研修が終わるたびに参加した職員は体験・経験したことを笑顔で丁寧に説明してくれます。また、どんな内容なら当館の事業として取り組むことができるのかを話す機会が増え、職員に選択肢が増えているのを感じました。当館では実施経験のない「こども食堂」と関わることは、現状行っている事業と今後コラボすることや、新しい事を立ち上げるきっかけとなり、文化会館としての役割を再認識できたと感じます。

堺市文化振興財団およびアーツカウンシルが実施する研修に参加させていただきありがとうございます。

おわりに

アートと地域における コーディネーターの可能性



文化芸術とコーディネーターの可能性

常盤 2年間本当にありがとうございました。多くの人にとって「文化芸術で社会的課題を解決する」というのは、ある種つかみどころのないテーマです。この研修ではそのテーマを抽象的に受け取るのではなく、相手のために何ができるか、というとても実際の視線で、アートと地域の結ぶ態度を参加者がインストールしていくことで、改めて「文化芸術の可能性」というべきものを、それぞれが感じ取ってくれたのではないかと考えています。

中脇 今回耳原総合病院さんから挙げた、職員間のコミュニケーションという課題に対しては通常、ビジネス領域によくある、組織開発コンサルティングや人材育成研修が解決策として提示されます。ただその場合、ともすれば予定調和な結論に終始することも少なくない。実は結構、当事者の方々にも「何か違うなあ」「他にないのかなあ」と感じている人は多いと思います。なので、今回のアサダさんの取組を、ただ「いやアーティストはやっぱり奇抜だなあ」という風に感心するだけで終わってしまうのではなく、「よくある研修と何が違

うのだろう？」とあえて組織開発や人材育成の観点で見ると、実は新しい可能性が見えてきます。

上田 昨今は課題発見・解決という言葉が大流行しており、今や私たちは何かにつけてそうした視線で物事を見てしまう癖がついたように思います。もちろん「解決」は大事ですが、そもそも何をすれば「解決」になるかは、あらかじめ分からないことも多い。ですから、今の自分の常識では呑み込めないことに挑戦する、予期せぬ身体の動かし方をしてみるのが大切で、そこから思わぬ何かを発見していくことがあります。知らない世界とつながる、世界と世界をつなげる、そうしたことがコーディネーターの役割とされる場面は多いように思います。

中脇 社会包摂や地域連携の事業を手がけるコーディネーターは、経験を重ねるうちにコミュニティ間のバイリンガルになっていくし、実際その能力が非常に求められる仕事です。ただそれをスキルと考えるのではなくて、自分の世界や見識を拡げるきっかけにしてほしいですね。今回の参加者も、「子ども食堂とはこんな場所なんだ」「病院はこんなことで悩んで

いるのか」と、たくさんの気づきがあったと思います。自分の知らない隣人の世界がいくつもあって、そこには悩みや課題がたくさんあると知ることは、これから先どんなキャリアを歩んだとしても役に立つし、何より人間の幅が広がることだと思います。

常盤 「社会包摂」という時、その反対にあるのが「排除」や「分断」です。それは知らない相手のことを知ろうともしない時に起こるものです。知ろうとして関わろうとするには、ちょっとした勇氣が必要ですが、お互いがちょっとずつ勇氣を出し合えるのが、僕はいい社会なんじゃないかなと思うのです。そしてワークショップはそれを可能にしてくれる、背中を押してくれる仕掛けだと思っています。

上田 みずしらずの人と楽しい時間を持てた、めったに会わないような人たちとコミュニケーションが生まれた、知っているつもりだった人の異なる側面を知り、人生の深淵を垣間見た。そういう体験からは、物事を決めつけないことだが大事だと気づかされ、ネガティブケイバビリティ（正解の出ない事態に耐える力）が鍛えられますし、思考力や寛容さを深めることにもなります。世界への想像力を広げていくには、文化芸術の翼をかりるのもいいと思うんです。

社会包摂事業をどう評価するか

常盤 他方でこうした事業を評価する手法はなかなか追いついていません。多くの場面で問われるのは「件数」ですが、この手の事業はパターンを量産するようなものではなく、むしろ1件ずつ、どれだけ誠意を持って現場に向き合えたかが大切です。もちろん無限には時間をかけられないし、特定の人だけに恩恵があるのはよくないというのもその通りです。定量評価を軽視するわけでもありません。ですが、この社会包摂事業の本質的部分を評価する指標や仕組みがないまま、ただ件数に縛られているだけでは、現場はどこを向いて仕事をすればよいか分からなくなります。参加者も、この研修での学びを各自の持ち場で活かそうとした時に、最初に直面することでしょう。

中脇 僕は端的に、コーディネーターの仕事において、実施に向けた準備や話し合い、ふりかえりをしている時間が評価の対象になっていないことが問題だと考えています。時間をかけて10人のこどものことを真剣に考えたワークショップをするよりも、対象が誰であろうと使いまわしのようなイベントに100人集める方が評価されてしまいかねない。大事なのは「工数への評価」です。文化芸術基本法や各自自治体のビジョンで謳われている「連携」や「協働」のため、実際にはどれくらいの手間をかけることが大切なのか。この冊子もその重

要性を伝えるためにあると思うんですよね。

上田 最近では、文化芸術の現場で起こった「エピソード」を評価の対象にするという動きがあると聞いています。それは例えば、ワークショップ中にこどもが普段見せない様子を見せた、というようなものです。まさにこうしたエピソードは、私たちがふりかえりを通して共有している事柄です。私たちが大切にしている軸が評価される未来に期待しましょう。

中脇 文化行政以外でも、行政関係者の方にはこうした文化芸術の取組に関心を持っていただきたいと思います。アーティストは表現を通して、僕たちを縛る慣習や前例を越えたり、ずらしたりしてくれる存在で、アーティストと関わることで、僕たちは日頃の生活や業務に大きなヒントを与えてくれます。ですので、例えば土木、人事、総務、水道といった、自分たちの仕事にアートは関係ないと思う部局の皆さんも、困りごとがあれば、是非アートを頼ってほしいと思います。

市民の皆さんへ

中脇 この冊子を読んで、「文化芸術って、そんなこともできるのか!」とわくわくしてもらえたらいいなと思います。もし、文化芸術のことをどこか遠い世界の存在だと思っていた人がいたとして、その人がこの研修のことを知って、自分の生活にも関係があるかも、と思ってもらえたら本当にうれしいです。

上田 文化芸術は「遠いもの」「余裕のある人のもの」と思われがちですが、実は皆さんの生活のすぐそばにあるものでもあるのです。例えばワークショップでは、参加することで他者から自分の存在を認められるという体験をすることがあります。自分がこの世に存在することを認められる、その感覚があるかないかでは、生きやすさはずいぶん変わると思います。文化芸術を通じて、その人が存在を表わし、認められた事例が、まさにこの冊子で紹介されている取組です。身近なところで、こうした場面がもっと生まれるように、自分も何かやってみよう、と思われたら、ぜひ堺アーツカウンスルに相談にいらしてください。

常盤 僕たちには常に市民還元責任がありますが、この「還元」の方法は多様だと思います。今回のような事業では、短期的な受益者は少ないかもしれませんが、長い目で見て、市民生活を豊かにする可能性が垣間見えたと思っています。市民一人一人の課題に向き合い、ワークショップを通して解決の糸口をアーティストと市民が一緒になって掴む。そうした現場をコーディネートする人材が増えていくことで、大変な世の中をみんなでもちょっとずつでも面白くしていけるような、そんな社会になればいいなと思います。

**公立文化施設職員が地域に出て
アートコーディネーターになるための2年間**
社会包摂についての学びと実践をふりかえる

発行日 2024年3月31日

発行 公益財団法人堺市文化振興財団
企画 公益財団法人堺市文化振興財団・堺アーツカウンシル
制作 狩野哲也事務所

問い合わせ
〒590-0061
堺市堺区翁橋町2丁1-1
公益財団法人堺市文化振興財団 事業課
tel: 072-228-0114 (平日9:00 ~ 17:30)
fax: 072-228-0115
mail: jigyosakai@sakai-bunshin.com
<https://www.sakai-bunshin.com/>



令和5年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

本事業は、「自由都市堺文化芸術まちづくり条例」第9条、第13条、
及び第2期堺文化芸術推進計画重点的施策1-1、1-2に基づき実施しています。

